

草の芽句会たより

NO,98
28,10,6

この道はどこへ続くや城の秋
黄の蝶のひらり飛び出づ残り萩

純子

逝きし子を祀りて老いぬ秋彼岸
台風の過ぎて一息花植えむ

節子

夏帽子いまだ離れぬ外出かな
庭下駄のとばされてるし野分晴

文子

挨拶のしたくなる空秋の空
木漏れ日のすすき露草城の径

貞子

水澄みて金魚の色の彩やかに
引き寄せて小さき花もつ蓬かな

禮子

穂芒の風に吹かるる我もまた
彼岸花 花触れ合うて咲きにけり

剋子

色鳥の木蔭に入りしささやきぬ
おさな児のこぶしのように芙蓉散る

範子

衰えの見えはじめたる彼岸花
秋灯読み疲れてはラジオ聞く

貞

出席者 大黒 氏家 馬場 森 川原 小山
投句者 真鍋 吉崎

城山には秋がきていた。大手門広場では菊花展の準備がはじまり、うるし林の桜が薄く色づいている。水引草が長けスキが揺れる。ケヤキ林を抜けて

いつもの小道を辿ると、咲き残る夏水仙が可憐な姿を見せていた。まばらに聞こえる蝉の声。吹きぬける風の涼しいこと！ どこかで木屋が香り、夏バテした心が蘇るよう。

次回は秋もたけなわ、紅葉が美しい頃である。二の丸跡にはもう冬桜が咲いているかも。澄んだ青空の下 端然とした飯野山の姿も楽しみにしたい。

